天草版『平家物語』における助詞の基幹語彙について
—『平家物語』〈高野本〉との比較を中心にして—

近　藤　政　美

On Fundamental Particles, *Joshi* in *The Tale of Heike Printed in Amakusa*
—As Compared with "*Takanobon*" *Version* of *The Tale of Heike*—

Masami Kondo

一　は　じ　め　に

この研究の目的は，天草版『平家物語』の語彙を主として計量的な方面から考察し，室町時代の日本語の話し言葉の性格を解明しようとするものである。先回特に「た」「ぢや」「う」などの助動詞の基幹語彙を中心に語彙表を作成し，文語体を基調にした『平家物語』〈高野本〉の助動詞と比較しつつ考察した(注1)。今回は「の」（格助，終助）・「で」（格助）・「から」（格助）などの助詞の基幹語彙を中心にして，同様の方法で語彙表を作成し，次の課題を解明する。

(イ)　助詞の語彙の全体像と基幹語彙の設定

(ロ)　『平家物語』〈高野本〉の基幹語彙との比較

　　a　使用度数を視点にして

　　b　機能を視点にして

(ハ)　助動詞の場合との比較

(ニ)　助詞の基幹語彙と作品の性格との関係

室町時代にはキリスト教の伝道のため，ヨーロッパからイエズス会の宣教師たちが来日した。天草版『平家物語』は彼らが日本の言葉とイストリヤを学ぶためのテキストとして編纂された。『平家物語』を当時の話し言葉に訳し，問答体に構成しなおしている。内表紙には1592年（文禄元年）九州の天草学林で刊行とあり，また同年12月10日付けの不干ハビヤン識語の序文がある。が，現在では日本に伝存せず，大英図書館所蔵の『伊曽保物語』『金句集』との合冊本が確認されているのみで，内表紙の裏に３書を合わせた1593年２月23日付けの序文（総序）がある。

この書は日本語を，ポルトガル語式の写音法を基本にしたローマ字で綴っている。このことと話し言葉に訳したもので語彙量も多いこととが主たる理由で，当時の口語の語彙・語法・音韻などの研究のためにもっとも重要な資料として位置づけられている。

なお，従前『平家物語』および天草版『平家物語』の語彙の研究には『平家物語総索引』［文献１］『天草版平家物語総索引』［文献２］を用い，単語の基準を調整して計量的比較を行なった。が，今回は次の文献を作成した上で，研究を進めた。

a　『平家物語〈高野本〉語彙用例総索引』（自立語篇）［文献３］

b　『平家物語〈高野本〉語彙用例総索引』（付属語篇）［文献４］

c　『天草版平家物語語彙用例総索引』［文献５］

また，天草版『平家物語』からの引用は漢字平仮名交じりに直して示すので，ローマ字綴りの原文で確かめたい場合は『天草版平家物語語彙用例総索引』第１冊〈影印・翻字篇〉を参照されたい。

『平家物語』諸本については次の略称を用いることもある。

〈天草版〉〈天〉……天草版『平家物語』

〈高野本〉〈高〉……『平家物語』〈高野本〉［文献６］

〈斯道本〉〈斯〉……『平家物語』〈斯道本〉［文献７］

〈駒大本29〉〈駒29〉……『平家物語』〈駒大本29〉［文献８］

二　助詞の語彙の全体像と基幹語彙

天草版『平家物語』は「扉・序・物語の本文・目録」の四部から成っている。以下はこのうちの物語の本文（３ページ～408ページ）に使用されている全部の語を取り上げて集計し，論述する。その理由は，これが作品の主体をなし，語彙量も多く，唯一口語体を基調としているからである。他の部分は文語文を基調にしており，語彙量も少ない。

天草版『平家物語』全体の語彙については，既に『天草版平家物語語彙用例総索引』第４冊の解説II(注2)において報告した。が，その後に一部修正したので，今回はこの数値によった。

この作品の延べ語数は91013になる。その内訳は自立語47301（519.72‰），付属語43712（480.28‰）である。『平家物語』〈高野本〉に使用されている延べ語数は176194で，自立語が99493（564.68‰），付属語が76701（435.32‰）である。〈高野本〉と比較すると，〈天草版〉の付属語の比率はかなり高い。

〈天草版〉の付属語のうち，助詞の延べ語数は32374（355.71‰）である。〈高野本〉は助詞56570（321.07‰）であるから，助詞の比率も又〈天草版〉では増加している。が，１語あたりの使用度数は平均462.49で，〈高野本〉の754.27の６割強である。これは異なり語数が70で〈高野本〉の75と比較して大差はないことに起因していると言えよう。なお，上記の解説IIの〈表８〉は助詞を主たる機能によって細分している語もあり，ここでの数値と異なる。

さて，〈天草版〉の助詞70語について各語の使用度数・使用比率・累積使用度数・順位を整理すると，次のようになる。

なお，使用比率は該当の語の助詞全部に対するもの（単位：‰）である。参考のため，〈高野本〉についても同じ項目（累積使用度数を除く）を対照して示した〔表１〕。

日本語の語彙の研究における基本語彙・基幹語彙・基礎語彙の概念は，従来必ずしも明確に区別し使用されてきたわけではない(注3)。本稿では「基幹語彙」を「ある特定語集団を対象にしての語彙調査から直接得られる，その語集団の骨格的部分集団」という意味で使用する。

大野晋は平安時代の和文脈系文学作品を対象にして語彙の研究をした時，「基本語彙」という語を用いた(注4)。そして，使用比率0.1‰を目安にしてそれ以上と定めた。又，西田直敏は『平家物語の文体論的研究』［文献９］において「基幹語彙」という語を用いたが，その概念と基準は大野の「基本語彙」の考え方に従っている。これらはすべて自立語を対象にした研究である。ここでは付属語の助詞を対象にするので，基準も別途に設定する必要がある。

先稿では，助動詞の基幹語彙の研究において各語の使用度数を使用比率によって４段階に分類

した。50.00‰以上の語集団を高位語（第一）〈第一基幹語彙〉，5.00‰以上の語集団を高位語（第二）〈第二基幹語彙〉，0.50‰以上の語集団を中位語，それ未満の語集団を低位語として設定した。そして，一作品に使用されていない語集団を「不使用」として示した〔表2〕。

〔表1〕　〈天草版〉の助詞の各語の使用度数（〈高野本〉対照）

iii						i				ii
番号	見出し項目	助詞の分類	〈天草版〉の集計				〈高野本〉の集計			
			使用度数	比率(‰)	累積度数	順位	使用度数	比率(‰)		順位
28	て	接助	● 4658	143.88	4658	1	● 6785	119.94		3
50	の	格助，終助	● 4263	131.68	8921	2	● 9849	174.1		1
47	に	格助，接助	● 3833	118.4	12754	3	● 7411	131.01		2
82	を	格助，接助，終助	● 3689	113.95	16443	4	● 5972	105.57		4
52	は	係助，終助	● 2886	89.15	19329	5	● 4685	82.82		5
31	と	格助，接助，並助	● 2842	87.79	22171	6	● 3914	69.19		6
63	も	係助	● 2121	65.52	24292	7	● 3393	59.98		7
53	ば	接助	● 1719	53.1	26011	8	● 2424	42.85		8
3	が	格助，接助	● 1391	42.97	27402	9	● 1291	22.82		10
57	へ	格助	● 733	22.64	28135	10	● 1211	21.41		11
29	で	格助	● 424	13.1	28559	11	● 198	3.5		23
37	ども	接助	● 419	12.94	28978	12	● 732	12.94		14
21	ぞ	係助，終助（文末），並助	● 406	12.54	29384	13	● 1644	29.06		9
2	か	係助，終助（文末），並助	● 377	11.65	29761	14	● 387	6.84		18
13	こそ	係助	● 372	11.49	30133	15	● 1024	18.1		12
84	をば	複合語	● 251	7.75	30384	16	● 459	8.11		17
9	から	格助	● 246	7.6	30630	17	× 0	0		76
61	まで	副助	● 168	5.19	30798	18	● 292	5.16		20
54	ばかり	副助	● 161	4.97	30959	19	● 246	4.35		21
35	とて	格助，接助	● 136	4.2	31095	20	● 1006	17.78		13
44	など	副助	● 132	4.08	31227	21	× 0	0		77
72	や	係助，終助，間助，並助	● 120	3.71	31347	22	● 567	10.02		16
1	いで	接助（打消）	● 108	3.34	31455	23	× 0	0		78
60	ほどに	接助	● 107	3.31	31562	24	● 109	1.93		26
81	より	格助	● 107	3.31	31669	25	● 715	12.64		15
36	とも	接助	● 76	2.35	31745	26	● 149	2.63		25
59	ほど	副助	● 76	2.35	31821	27	● 74	1.31		33
78	よ	間助	● 62	1.92	31883	28	● 69	1.22		36
15	さへ	副助	● 54	1.67	31937	29	● 21	0.37		47
71	ものを	接助，終助	● 48	1.48	31985	30	● 68	1.2		37
17	して	格助，接助	● 46	1.42	32031	31	● 210	3.71		22
43	ながら	接助	● 37	1.14	32068	32	● 82	1.45		31
6	かな	終助（詠嘆）	● 35	1.08	32103	33	● 74	1.31		34

40	な	終助（禁止）	●	34	1.05	32137	34	●	43	0.76	39
51	のみ	副助	●	30	0.93	32167	35	●	48	0.85	38
4	かし	終助	●	29	0.9	32196	36	●	70	1.24	35
45	なりとも	複合語	●	21	0.65	32217	37	×	0	0	79
75	やら	副助	●	17	0.53	32234	38	×	0	0	80
20	そ	終助（禁止）	●	16	0.49	32250	39	●	24	0.42	45
66	ものかな	終助	●	13	0.4	32263	40	●	30	0.53	44
46	なんど	副助	●	11	0.34	32274	41	●	196	3.46	24
22	だに	副助	●	10	0.31	32284	42	●	93	1.64	29
24	ぢやは	複合語	●	9	0.28	32293	43	×	0	0	81
30	で	接助（打消）	●	8	0.25	32301	44	●	94	1.66	28
56	ばや	終助	●	7	0.22	32308	45	●	81	1.43	32
8	かは	複合語	●	7	0.22	32315	46	●	37	0.65	40
49	にて	格助	●	6	0.19	32321	47	●	356	6.29	19
34	として	複合語	●	6	0.19	32327	48	●	33	0.58	43
65	ものか	終助	●	6	0.19	32333	49	●	1	0.02	63
18	しも	副助	●	5	0.15	32338	50	●	19	0.34	48
42	なう	終助	●	5	0.15	32343	51	×	0	0	82
41	な	間助	●	3	0.09	32346	52	●	15	0.27	49
27	づつ	副助	●	3	0.09	32349	53	●	12	0.21	52
26	つつ	接助	●	2	0.06	32351	54	●	96	1.7	27
33	とかや	複合語	●	2	0.06	32353	55	●	36	0.64	42
39	とよ	複合語	●	2	0.06	32355	56	●	14	0.25	50
19	ずんば	複合語	●	2	0.06	32357	57	●	4	0.07	54
62	まれ	複合語	●	2	0.06	32359	58	●	3	0.05	56
70	ものゆゑに	接助	●	2	0.06	32361	59	●	3	0.05	57
55	ばし	副助	●	2	0.06	32363	60	●	1	0.02	64
73	やな	複合語	●	2	0.06	32365	61	×	0	0	83
77	やらん	複合語	●	1	0.03	32366	62	●	88	1.56	30
32	ど	接助	●	1	0.03	32367	63	●	22	0.39	46
16	し	副助	●	1	0.03	32368	64	●	3	0.05	58
80	よな	複合語	●	1	0.03	32369	65	●	3	0.05	59
7	がな	終助（願望）	●	1	0.03	32370	66	●	1	0.02	65
38	ともがな	複合語	●	1	0.03	32371	67	●	1	0.02	66
69	ものゆゑ	接助	●	1	0.03	32372	68	●	1	0.02	67
64	もがな	終助	●	1	0.03	32373	69	×	0	0	84
67	ものかは	終助	●	1	0.03	32374	70	×	0	0	85
48	にして	複合語	×	0	0	32374	71	●	37	0.65	41
11	ごさんなれ	複合語	×	0	0	32374	72	●	13	0.23	51
85	をや	終助	×	0	0	32374	73	●	12	0.21	53
74	やは	複合語	×	0	0	32374	74	●	4	0.07	55
10	からに	接助	×	0	0	32374	75	●	3	0.05	60

12	ごさんめれ	複合語	×	0	0	32374	76	●	2	0.04	61
76	やらう	複合語	×	0	0	32374	77	●	2	0.04	62
5	がてら	副助	×	0	0	32374	78	●	1	0.02	68
14	ごとくんば	複合語	×	0	0	32374	79	●	1	0.02	69
23	だも	複合語	×	0	0	32374	80	●	1	0.02	70
25	つ	格助	×	0	0	32374	81	●	1	0.02	71
58	べくんば	複合語	×	0	0	32374	82	●	1	0.02	72
68	ものの	接助	×	0	0	32374	83	●	1	0.02	73
79	よう	間助	×	0	0	32374	84	●	1	0.02	74
83	をして	複合語	×	0	0	32374	85	●	1	0.02	75
	合計			32374	1000				56570	1000	

備考　1　表の上部のⅰ，ⅱ，ⅲは並列の優先順位を示す。
　　2　表中の●印は使用されている語，×印は使用されていない語を示す。

〔表２〕　〈天草版〉の助詞の使用比率による分類基準

(i)　高位語（第一）	$50.00 \leqq \alpha$	第一基幹語彙
(ii)　高位語（第二）	$5.00 \leqq \alpha < 50.00$	第二基幹彙
(iii)　中位語	$0.50 \leqq \alpha < 5.00$	
(iv)　低位語	$0 < \alpha < 0.50$	
(v)　不使用	$\alpha = 0$	

備考　上記のαは各段階での使用比率を示す。単位はすべて‰である。

本稿の助詞の基幹語彙についても，この基準を適用する。

第一基幹語彙は〔表Ⅰ〕の「て」（接助）から「ば」（接助）までの８語である。これらの使用度数は特に多い。累積使用度数が26011で，助詞の全使用度数に対して303.45‰になる。そして，第二基幹語彙は「が」（格助・接助）から「まで」（副助）までの10語である。これらを加えると，累積使用度数は30798で，助詞の全使用度数に対して951.32‰である。

両者を合せて〈天草版〉の助詞の基幹語彙とする。

三　基幹語彙の使用度数を視点にした〈高野本〉との比較

〈高野本〉の助詞の各語を使用度数の多い順に並べ，全助詞に対する比率（単位：‰）を記すと次のようになる。

〔表３〕　〈高野本〉の助詞の各語の使用度数（〈天草版〉対照）

ⅲ					ⅱ				ⅰ
番号	見出し項目	助詞の分類	〈天草版〉の集計			〈高野本〉の集計			
			使用度数	比率(‰)	順位	使用度数	比率(‰)	累積度数	順位
50	の	格助，終助	● 4263	131.68	2	● 9849	174.1	9849	1
47	に	格助，接助	● 3833	118.4	3	● 7411	131.01	17260	2
28	て	接助	● 4658	143.88	1	● 6785	119.94	24045	3
82	を	格助，接助，終助	● 3689	113.95	4	● 5972	105.57	30017	4

52	は	係助，終助	●	2886	89.15	5	●	4685	82.82	34702	5
31	と	格助，接助，並助	●	2842	87.79	6	●	3914	69.19	38616	6
63	も	係助	●	2121	65.52	7	●	3393	59.98	42009	7
53	ば	接助	●	1719	53.1	8	●	2424	42.85	44433	8
21	ぞ	係助，終助（文末），並助	●	406	12.54	13	●	1644	29.06	46077	9
3	が	格助，接助	●	1319	42.97	9	●	1291	22.82	47368	10
57	へ	格助	●	733	22.64	10	●	1211	21.41	48579	11
13	こそ	係助	●	372	11.49	15	●	1024	18.1	49603	12
35	とて	格助，接助	●	136	4.2	20	●	1006	17.78	50609	13
37	ども	接助	●	419	12.94	12	●	732	12.94	51341	14
81	より	格助	●	107	3.31	25	●	715	12.64	52056	15
72	や	係助，終助，間助，並助	●	120	3.71	22	●	567	10.02	52623	16
84	をば	複合語	●	251	7.75	16	●	459	8.11	53082	17
2	か	係助，終助（文末），並助	●	377	11.65	14	●	387	6.84	53469	18
49	にて	格助	●	6	0.19	47	●	356	6.29	53825	19
61	まで	副助	●	168	5.19	18	●	292	5.16	54117	20
54	ばかり	副助	●	161	4.97	19	●	246	4.35	54363	21
17	して	格助，接助	●	46	1.42	31	●	210	3.71	54573	22
29	で	格助	●	424	13.1	11	●	198	3.5	54771	23
46	なんど	副助	●	11	0.34	41	●	196	3.46	54967	24
36	とも	接助	●	76	2.35	26	●	149	2.63	55116	25
60	ほどに	接助	●	107	3.31	24	●	109	1.93	55225	26
26	つつ	接助	●	2	0.06	54	●	96	1.7	55321	27
30	で	接助（打消）	●	8	0.25	44	●	94	1.66	55415	28
22	だに	副助	●	10	0.31	42	●	93	1.64	55508	29
77	やらん	複合語	●	1	0.03	62	●	88	1.56	55596	30
43	ながら	接助	●	37	1.14	32	●	82	1.45	55678	31
56	ばや	終助	●	7	0.22	45	●	81	1.43	55759	32
59	ほど	副助	●	76	2.35	27	●	74	1.31	55833	33
6	かな	終助（詠嘆）	●	35	1.08	33	●	74	1.31	55907	34
4	かし	終助	●	29	0.9	36	●	70	1.24	55977	35
78	よ	間助	●	62	1.92	28	●	69	1.22	56046	36
71	ものを	接助，終助	●	48	1.48	30	●	68	1.2	56114	37
51	のみ	副助	●	30	0.93	35	●	48	0.85	56162	38
40	な	終助（禁止）	●	34	1.05	34	●	43	0.76	56205	39
8	かは	複合語	●	7	0.22	46	●	37	0.65	56242	40
48	にして	複合語	×	0	0	71	●	37	0.65	56279	41
33	とかや	複合語	●	2	0.06	55	●	36	0.64	56315	42
34	として	複合語	●	6	0.19	48	●	33	0.58	56348	43
66	ものかな	終助	●	13	0.4	40	●	30	0.53	56378	44
20	そ	終助（禁止）	●	16	0.49	39	●	24	0.42	56402	45
32	ど	接助	●	1	0.03	63	●	22	0.39	56424	46
15	さへ	副助	●	54	1.67	29	●	21	0.37	56445	47
18	しも	副助	●	5	0.15	50	●	19	0.34	56464	48
41	な	間助	●	3	0.09	52	●	15	0.27	56479	49
39	とよ	複合語	●	2	0.06	56	●	14	0.25	56493	50

11	ごさんなれ	複合語	×	0	0	72	●	13	0.23	56506	51
27	づつ	副助	●	3	0.09	53	●	12	0.21	56518	52
85	をや	終助	×	0	0	73	●	12	0.21	56530	53
19	ずんば	複合語	●	2	0.06	57	●	4	0.07	56534	54
74	やは	複合語	×	0	0	74	●	4	0.07	56538	55
62	まれ	複合語	●	2	0.06	58	●	3	0.05	56541	56
70	ものゆゑに	接助	●	2	0.06	59	●	3	0.05	56544	57
16	し	副助	●	1	0.03	64	●	3	0.05	56547	58
80	よな	複合語	●	1	0.03	65	●	3	0.05	56550	59
10	からに	接助	×	0	0	75	●	3	0.05	56553	60
12	ごさんめれ	複合語	×	0	0	76	●	2	0.04	56555	61
76	やらう	複合語	×	0	0	77	●	2	0.04	56557	62
65	ものか	終助	●	6	0.19	49	●	1	0.02	56558	63
55	ばし	副助	●	2	0.06	60	●	1	0.02	56559	64
7	がな	終助（願望）	●	1	0.03	66	●	1	0.02	56560	65
38	ともがな	複合語	●	1	0.03	67	●	1	0.02	56561	66
69	ものゆゑ	接助	●	1	0.03	68	●	1	0.02	56562	67
5	がてら	副助	×	0	0	78	●	1	0.02	56563	68
14	ごとくんば	複合語	×	0	0	79	●	1	0.02	56564	69
23	だも	複合語	×	0	0	80	●	1	0.02	56565	70
25	つ	格助	×	0	0	81	●	1	0.02	56566	71
58	べくんば	複合語	×	0	0	82	●	1	0.02	56567	72
68	ものの	接助	×	0	0	83	●	1	0.02	56568	73
79	よう	間助	×	0	0	84	●	1	0.02	56569	74
83	をして	複合語	×	0	0	85	●	1	0.02	56570	75
9	から	格助	●	246	7.6	17	×	0	0	56570	76
44	など	副助	●	132	4.08	21	×	0	0	56570	77
1	いで	接助（打消）	●	108	3.34	23	×	0	0	56570	78
45	なりとも	複合語	●	21	0.65	37	×	0	0	56570	79
75	やら	副助	●	17	0.53	38	×	0	0	56570	80
24	ぢやは	複合語	●	9	0.28	43	×	0	0	56570	81
42	なう	終助	●	5	0.15	51	×	0	0	56570	82
73	やな	複合語	●	2	0.06	61	×	0	0	56570	83
64	もがな	終助	●	1	0.03	69	×	0	0	56570	84
67	ものかは	終助	●	1	0.03	70	×	0	0	56570	85
	合計			32374	1000			56570	1000		

備考　1　表の上部のⅰ，ⅱ，ⅲは並列の優先順位を示す。
　　2　表中の●印は使用されている語，×印は使用されていない語を示す。

〈高野本〉で使用度数が最も多い語は「の」（格助・終助）である。度数9849，助詞全体に対する比率174.10‰である。〈高野本〉の助詞を代表する語であるが，比率は助動詞の場合の「けり」（205.16‰）ほど突出した数値でない。

第一基幹語彙は〔表３〕の「の」から「も」までの７語である。第一基幹語彙の使用度数が特に多いのは，〈天草版〉と同様である。累積使用度数は42009で助詞の全使用度数56570に対して742.60‰になる。この比率は語数を上位８語までにすれば785.45‰で，〈天草版〉の803.45‰に近くな

る。そして，第二基幹語彙は「ば」から「まで」までの13語である。これらを加えた20語の累積使用度数は54117で，956.64‰になる。この比率を上位18語までにしても945.18‰で，〈天草版〉の951.32‰に近い。

助動詞の場合と異なる最大の特徴は，〈天草版〉の第一基幹語彙に入る８語が〈高野本〉の使用度数の上位８語と同じ語であることだ。ただし，このことは〈高野本〉で考える時，第一基幹語彙が７語であるため，第二基幹語彙の１語「ば」（接助）を合せた８語ということになる。またこの中には古来助詞の代表とされた「て，に，を，は」の４語も含まれている。

〈天草版〉の第一基幹語彙を使用度数順に配列すると，次のようになる。なお，右の（　）に示したのは，〈高野本〉の使用度数の順位とそれによって分類した段階である。

参考のため助動詞の第一基幹語彙を対照して示すと，次の右欄のようになる。

〔表４〕助詞の第一基幹語彙の使用度数の順位

●助詞の第一基幹語彙		●助動詞の第一基幹語彙	
〈天草版〉	〈高野本〉	〈天草版〉	〈高野本〉
1　て	（3，第一基幹語彙）	1　た	（33，低位語）
2　の	（1，第一基幹語彙）	2　らる	（10，第二基幹語彙）
3　に	（2，第一基幹語彙）	3　る	（5，第一基幹語彙）
4　を	（4，第一基幹語彙）	4　たり〔完了〕	（4，第一基幹語彙）
5　は	（5，第一基幹語彙）	5　ぢや	（不使用）
6　と	（6，第一基幹語彙）	6　ず	（2，第一基幹語彙）
7　も	（7，第一基幹語彙）	7　う	（22，中位語）
8　ば	（8，第二基幹語彙）	8　うず	（31，低位語）

〈高野本〉の助詞の第一基幹語彙は使用度数の順位も〈天草版〉の１，２，３位が３，１，２位になっていること以外は同じである。また，両作品における各語が助詞全体の中で占める比率を比較する時，〈天草版〉を基準にすると，〈高野本〉ではすべて75％～150％の中に収まる。このことは，第一基幹語彙の助詞の各語が両作品において担っている役割に大差ないことを示している。

そして，助動詞の第一基幹語彙では〈天草版〉の「た」や〈高野本〉の「けり」のような使用度数の突出した語の存すること，第一基幹語彙で共通するのは３語（「る」「たり（完了）」「む」）にすぎないことなど，両作品において各語が担っている役割に大差があった。この点で第一基幹語彙の助詞は助動詞と大きな相違がある。

〈天草版〉の助詞の第二基幹語彙と〈高野本〉の第二基幹語彙を上記にならって示すと，次のようになる。

〔表５〕助詞の第二基幹語彙の使用度数の順位

○助詞の第二基幹語彙		○助動詞の第二基幹語彙	
〈天草版〉	〈高野本〉	〈天草版〉	〈高野本〉
9　が	（10，第二基幹語彙）	9　す	（11，第二基幹語彙）
10　へ	（11，第二基幹語彙）	10　なり〔断定〕	（3，第一基幹語彙）

11	で	(23, 中位語)	11	さす	(12, 第二基幹語彙)
12	ども	(14, 第二基幹語彙)	12	なんだ	(不使用)
13	ぞ	(9, 第二基幹語彙)	13	やうなり	(20, 第二基幹語彙)
14	か	(18, 第二基幹語彙)	14	まじ	(21, 第二基幹語彙)
15	こそ	(12, 第二基幹語彙)	15	まい	(不使用)
16	をば	(17, 第二基幹語彙)	16	らう	(不使用)
17	から	(不使用)			
18	まで	(20, 第二基幹語彙)			

〈天草版〉の助詞の第二基幹語彙は〈高野本〉でも第二基幹語彙であるのが8語，不使用と中位語が各1語である。第一基幹語彙と比較すれば，「から」(格助) が現れ「で」(格助) が増加するという相違がある。

第二基幹語彙では〈天草版〉に10語，そのうちの「へ」(格助)「ども」(接助)「をば」(複助)「まで」(副助) の4語が〈高野本〉との使用比率を比較すると75%～150%の中に収まる。が，それ以外の6語は使用比率にかなりの相違が見られる。

これらに○印を付し，〈高野本〉と対照して使用比率を示すと，次のようになる。なお，中位語のうちにも同じ傾向を示すものが存するので，参考のため［　］内に示す。

〔1〕　使用比率が〈高野本〉と比較して高い語

A　2.0倍以上

○　から (格助)　　〈天草版〉7.60‰，〈高野本〉用例ナシ。

○　で　(格助)　　〈天草版〉13.10‰，〈高野本〉3.50‰。

［など (副助)，いで (接助，打消)，なりとも (複助)，やら (副助)，さへ (副助)］

B　1.5倍以上で2.0倍未満

○　が (格助，接助)　　〈天草版〉42.97‰，〈高野本〉22.82‰。

○　か (係助，終助，並助)　　〈天草版〉11.65‰，〈高野本〉6.84‰。

［ほど (副助)，ほどに (接助)，よ (間助)］

〔2〕　使用比率が〈高野本〉と比較して低い語

A　0.5倍未満

○　ぞ (係助，終助，並助)　　〈天草版〉12.54‰，〈高野本〉29.06‰。

［して (格助，接助)，や (係助，終助，間助，並助)，で (接助，打消)，より (格助)，とて (格助，接助)］

B　0.75倍未満で0.5倍以上

○　こそ (係助)　　〈天草版〉11.49‰，〈高野本〉18.10‰。

［かし (終助)］

〈天草版〉の助詞を使用比率の高低という視点から〈高野本〉と比較した場合，〈天草版〉を作品として特徴づける語は第一基幹語彙の中には見出せない。が，第二基幹語彙の中に上記の6語を指摘することができる。また，同じ傾向の語を中位語・低位語の中から指摘することもできる。

四　〈天草版〉を作品として特徴づける第二基幹語彙

〈天草版〉の第二基幹語彙は助詞の場合5.00‰以上にして50.00‰未満の語集団である。使用比率を視点にした場合これに属する語は10語，そのうちの6語が〈高野本〉と比較して特徴を有すると言えよう。以下，この6語について第一基幹語彙には見られない〈天草版〉との深い関わりを，使用比率が〈高野本〉より高い語彙と低い語彙に分けて考察してみよう。

(一)　〈高野本〉より使用比率の高い語

〔I〕　「から」(格助)〔室町時代の話し言葉〕

「から」(格助)は〈天草版〉で使用度数246 (7.60‰) である。が，〈高野本〉で全く見られない(注5)。この語は「より」(格助)と関係が深い。しかも，この「より」は両作品で使用されている。

	から（格助）		より（格助）	
	使用度数	使用比率	使用度数	使用比率
〈天草版〉	246	7.60‰	107	3.31‰
〈高野本〉	0	0.00‰	715	12.64‰

「より」を意味上から整理すると，次のようになる。

(a)　比較の基準　　(b)　限定　　(c)　起点・経由点ほか

「から」が用いられるのは，このうちの(c)の場合のみである。これを〈天草版〉の口語訳の原拠に近い本文を有する『平家物語』(注6)の〈高野本〉などと対照して整理すると，次のようになる。

i　〈天草版〉の「から」が〈高野本〉などで「より」(c)と対応

ii　〈天草版〉の「から」が〈高野本〉などで「より」以外の語と対応

iii　〈天草版〉の「から」が〈高野本〉などで対応語句なし

▼　iの例

〈天〉　(俊寛僧都が都からの使いの基康に) 何事ぞ？ これこそ京から流された俊寛よと名のられたれば，　74⑭

〈高〉　「何事ぞ，是こそ京より流されたる俊寛よ」と名乗給へば，　上141⑪

▼　ii・iii　の例

〈天〉　夜明けてから (ii)，また (平家の侍) 三十人余りの首を切りかけてから (iii)，木曽殿が言れたは；　168⑮・168⑯

〈斯〉　夜明テ後，然ルヘキ者共三十余人頸ヲ切懸テ□木曽宣ケルハ，　431⑪・432①

▼　iiiの例

〈天〉　喜一．……大唐，日本において驕りを極めた人々の果てた様体を且つ申してから，……ことを載せたものでござる．　3⑰

〈高〉　〈斯〉とも，対応箇所なし。

上記のうち，iの例が大変多い。室町時代の話し言葉では(c)の意味で「から」が多用された。が，「より」も消滅したわけではない。〈高野本〉などでこの意味の「より」が，〈天草版〉で一部

「より」と対応しているのはその証拠である。が，多くは「から」と対応している。換言すれば，口語訳の原拠にした『平家物語』には(c)の意味の「より」が多く，その大部分が「から」と訳された。その結果，〈天草版〉では「から」が第二基幹語彙になり，反対に「より」の使用比率が低下して中位語（3.31‰）になった。

〔II〕　「で」（格助）〔「にて」（格助）の変化した語〕

「で」（格助）は〈天草版〉での使用度数424（13.10‰）である。〈高野本〉はそれが198（3.50‰）である。〈天草版〉の比率は〈高野本〉の3.74倍である。この大きな差はどこから生じたか。

	で（格助）		にて（格助）	
	使用度数	使用比率	使用度数	使用比率
〈天草版〉	424	13.10‰	6	0.19‰
〈高野本〉	198	3.50‰	356	6.29‰

〈天草版〉の「で」（格助）を〈高野本〉などとの対応から分類すると，次のようになる。

i　〈天草版〉の「で」（格助）が，〈高野本〉などの「で」（格助）と対応
ii　〈天草版〉の「で」（格助）が，〈高野本〉などの「にて」（格助）と対応
iii　〈天草版〉の「で」（格助）が，〈高野本〉などのその他の語句と対応
iv　〈天草版〉の「で」（格助）と対応する語句が，〈高野本〉などには存しない

▼　i，ii の例

〈天〉　兼平も六千余騎で日の宮林から一度に喚いて馳せ向かふによって，　167⑪
〈高〉　今井四郎が六千余騎で（i）日宮林にありけるも，同じく時をぞつくりける。　下18⑤
〈斯〉　今井四郎兼平六千余騎ニテ（ii）日宮林ヨリ一度ニオメイテ馳向。　430⑧

▼　ii の例

〈天〉　さうして十月二十三日の明くる日，源氏平家富士川で矢合はせと定められて，　152⑮
〈高〉　……あすは源平富士河にて矢合と定めたりけるに，　上308⑪

▼　iii の例

〈天〉　当家の数輩一の谷で討たれてござれば，　293㉔
〈高〉　当家数輩，一谷にして既に誅せられおはンぬ。　下209⑨
〈斯〉　当家ノ数輩，於レ摂州一谷ニ被ヲ討畢。　575⑧

▼　iv　の例

〈天〉　右馬．その島であったことどもをもお語りあれ．　65⑯
〈高〉　対応語句　なし

「で」（格助）は「にて」（格助）の音韻変化したものである。したがって意味の上では同じである。「にて」の使用度数は6（0.19‰）で，きわめて少ない。が，〈高野本〉では356（6.29‰）で第二基幹語彙に入る。〈天草版〉の「で」（格助）はi，iiの例が多い。そのうち〈高野本〉の

「にて」と対応するiiが，両本における「で」（格助）の比率の大差に影響を及ぼしている。iii，ivのような例は余り多くない。

〔III〕　「が」〔格助詞・接続助詞の使用比率〕

助詞「が」は〈天草版〉での使用度数1391（42.97‰）である。〈高野本〉ではそれが1291（22.82‰）である。使用度数に大きな相違はないが，〈天草版〉の使用比率が〈高野本〉の1.88倍である。この相違はどこから生じたか。

	「が」（合計）		が（格助）		が（接助）	
	使用度数	使用比率	使用度数	使用比率	使用度数	使用比率
〈天草版〉	1319	42.97‰	1095	33.82‰	296	9.14‰
〈高野本〉	1291	22.82‰	996	17.61‰	295	5.21‰

〈天草版〉の「が」には，その機能から分類すると（格助）（接助）の2種が存する。（格助）としての使用度数は1095（33.82‰）である。〈高野本〉の996（17.61‰）と比較すると，その使用比率は1.97倍である。そして，（接助）としての使用度数は296（9.14‰）である。〈高野本〉の295（5.21‰）と比較すると，1.75倍である。（格助）（接助）の場合とも，その使用比率の倍数が増加している。

〈天草版〉の「が」（格助）には，主格・連体修飾格の2種の用法がある。それを〈高野本〉との対応から分類すると，次のようになる。

a i　〈天草版〉の「が」（格助）が，〈高野本〉などの主格表示の「が」と対応
a ii　〈天草版〉の「が」（格助）が，〈高野本〉などの主格表示の「の」と対応
a iii　〈天草版〉の「が」（格助）に対応する〈高野本〉などの語句に，（格助）が存しない
a iv　〈天草版〉の「が」（格助）に対応する語句が，〈高野本〉などに存しない
b i　〈天草版〉の「が」（格助）が，〈高野本〉などの連体修飾格「が」と対応
b ii　〈天草版〉の「が」（格助）が，〈高野本〉などの連体修飾格「の」と対応

このうち特に多く見られるのは，a iii・a ivの用例である。これらが〈天草版〉に「が」（格助）の使用比率を高くしている主たる原因である。

▼　a iiiの例

〈天〉　（清盛）さればこそ行綱はまことを言うた：このことを行綱が知らせずは，清盛安穏にあらうかと言うて，　23⑰

〈高〉　「さればこそ，この事行綱□しらせずは，浄海安穏にあるべしや」とて，　上77⑧

▼　a ivの例

〈天〉　喜．そのことでござる．あの公家たちがこのやうなことをせらるることは，今に始めぬことでござぁる．　6-22

〈高〉　など　対応する文が存しない

第一節で述べたように，〈天草版〉は『平家物語』を話し言葉に書きなおすに際して問答体を採用した。また自立語で計算すると語彙量が約半分で，抜き書き的性格もある。そのため理解しやすいように，aivの例のように原拠にない語句も添加され，要約によって生じた文も多く存する。

次に〈天草版〉の「が」（接助）を，〈高野本〉などとの対応から分類してみよう。

c i　〈天草版〉の「が」（接助）が，〈高野本〉などの「が」（接助）と対応

c ii　〈天草版〉の「が」（接助）が，〈高野本〉などのその他の語句と対応

c iii　〈天草版〉の「が」（接助）に対応する接続語句が〈高野本〉などに存しない

▼　c iの例

〈天〉　古へ漢王胡国を攻められた時，……三十万騎向けられたが，……官軍皆討ち滅ぼされ，　68⑩

〈高〉　いにしへ漢王，胡国を攻められけるに，……三十万騎向けられたりけるが，……官軍みなうちほろぼさる。　上131②

▼　c iiの例

〈天〉　（有王が俊寛僧都のことを）常は六波羅の辺に佇み歩いて聞いたが，赦免あらうとも聞き出さなんだによって，　84②

〈高〉　常は六波羅辺にたゝずみありいて聞けれ共，いつ赦免あるべし共聞出さず。　上160⑬

〈斯〉　其夜ハ六波羅辺ニタゝスミテ伺ヒ聞ケレトモ，聞出シタルコトモナシ。　184⑤

▼　c iiiの例

〈天〉　（浄妙坊の）肩をゆらりっと越えて戦うたが，一来法師はやがてそこで死んだ。　127㉒

〈高〉　肩をづんどおどり越えてぞ戦いける。□一来法師討死してんげり。　上242③

〈斯〉　肩ヲ軽（ユラ）ト越テソ戦ケル。□一来法師ヤカテ討死シテンケリ。　278⑧

上記のうち，特に多く見られるのはｃｉとｃiiiの例である。〈天草版〉は〈高野本〉などと比較して，一般に文が長い。それはｃiiiの例のような接続語句を多く使用しているからである。その中でも特に「が」（接助）が多く，〈天草版〉にこの語の多い要因になっている。なお，このような用例の多くは単純接続の意味で用いられている。が，稀に逆態接続の意味の用例も存する。

〔IV〕　「か」〔係助詞・終助詞の使用比率〕

助詞の「か」は〈天草版〉〈高野本〉ともに第二基幹語彙に入る。〈天草版〉で使用度数377（11.65‰），〈高野本〉でそれが387（6.84‰）である。両者の使用度数に大きな差はないが，〈天草版〉の使用比率は〈高野本〉の1.70倍である。この相違はどこから生じたか。

助詞「か」は機能により（係助）（終助）（並助）の３種に分類される。両作品の各の使用度数・使用比率を示すと，次のようになる。

	「か」（合計）		か（係助）		か（終助）		か（並助）	
	使用度数	使用比率	使用度数	使用比率	使用度数	使用比率	使用度数	使用比率
〈天草版〉	377	11.65‰	82	2.53‰	259	8.00‰	36	1.11‰
〈高野本〉	387	6.84‰	230	4.07‰	115	2.03‰	42	0.74‰

分類した３種の使用比率を考えてみよう。（係助）は〈高野本〉が高く，（終助）（並助）は〈天

草版〉が高い。そして，〈天草版〉の（終助）の使用度数が多く，使用比率が〈高野本〉の約4倍であるので，「か」全体の使用比率は〈高野本〉より高くなっている。

このような結果になった原因は何か。

〈天草版〉の「か」（終助）が〈高野本〉などではどのような語句と対応しているか，整理すると次のようになる。

i　〈天草版〉の「か」（終助）が，〈高野本〉などの「か」（終助）と対応

ii　〈天草版〉の「か」（終助）が，〈高野本〉などの「か」（係助）と対応

iii　〈天草版〉の「か」（終助）が，〈高野本〉などでその他の語句と対応
〈「や」（係助）との対応が多い〉

iv　〈天草版〉の「か」（終助）と対応する語句が，〈高野本〉に存しない

▼　iの例

〈天〉　（俊寛僧都が有王に）今またそちの便りにも音信のないはかうとも言はれなんだか？　88㉑

〈高〉　「今汝がたよりにも，音づれのなきは，かう共言はざりけるか」。　上165-③

▼　iiの例

〈天〉　義経あらはにならせらるるところに，いつの間に進んだか嗣信義経の矢面にむずとへだたるところを，　333⑯

〈高〉　該当の語句なし　下272②

〈斯〉　判官アラワニ成玉フ処ニ，イツノ間ニカ進ケン，佐藤三郎兵衛次信……判官ノ矢面ニ無手ト隔ル処ヲ，　645⑤

▼　iiiの例

〈天〉　（義経三千余騎で）ここを落さうとせらるるに，この勢に驚いたか，大鹿二つ一の谷の城の内へ落ちたれば，　270⑳

〈高〉　すでに落さんとしたまふに，其勢にや驚いたりけん，大鹿二・妻鹿一平家の城郭，一谷へぞ落たりける。　下164⑪

〈斯〉　コヽヲ落ントシ玉フニ，此勢ニヤ驚タリケン，大鹿二ツ一谷ノ城ノ内ヘソ落タリケル。　535⑤

▼　ivの例

〈天〉　右馬．して法皇のお行方は後にも知れなんだか？　196⑯

〈高〉　対応箇所なし

全体としてはiiiの例が多い。特に〈天草版〉の「か」（終助）が〈高野本〉〈斯道本〉の「や」（係助）と対応する例が目立つ。これが〈天草版〉の助詞「か」の使用比率を押し上げる要因になっている。同じ意味の「や」（係助）が衰退し，「か」（終助）が台頭していくのである。iiの用例は少ない。ivの用例も余り多くない。また反対に，助詞「や」が〈高野本〉で第二基幹語彙になっているのに〈天草版〉で使用比率が低くなっているのも，これと関連している。（注7）の表を参照。

(二)　〈高野本〉より使用比率の低い語

〔V〕　「ぞ」〔係助詞・終助詞の比率〕

助詞「ぞ」の使用度数は〈天草版〉で406（12.54‰），〈高野本〉で1644（29.06‰）である。〈天草版〉の使用比率は〈高野本〉の0.43倍にあたる。なぜこのような低い比率になったのか，その要因を探ってみよう。

先ず「ぞ」を機能によって（係助）（終助）（並助）の3種に分類すると，次のようになる。ただし，文末の用法は終助詞の中に含む。

	ぞ（合計）	（係助）	（終助）	（並助）
	使用比率	使用比率	使用比率	使用比率
〈天草版〉	406	30	376	0
	12.54‰	0.93‰	11.61‰	0.00‰
〈高野本〉	1644	1355	287	2
	29.06‰	23.95‰	5.07‰	0.04‰

〈天草版〉の助詞「ぞ」の使用比率が〈高野本〉と比較して特に低いのは，（係助）が0.93‰で，〈高野本〉の23.95‰よりも極端に低いことによる。（終助）の使用比率は逆に〈天草版〉の方が高く，（並助）は〈高野本〉に2例のみで全体の使用比率にはあまり影響していない。

〈天草版〉の「ぞ」（係助）と「ぞ」（終助）とが〈高野本〉などでどんな語句と対応しているか，また〈高野本〉などの「ぞ」（係助）と「ぞ」（終助）とが〈天草版〉でどんな語句と対応しているか，整理すると次のようになる。

a i　〈天草版〉の「ぞ」（係助）が〈高野本〉などの「ぞ」（係助）と対応
〈30例の内では比較的多い〉

a ii　〈天草版〉の「ぞ」（係助）を含む語句が〈高野本〉などのその他の語句と対応

a iii　〈高野本〉などの「ぞ」（係助）またはそれを含む語句が〈天草版〉のその他の語句と対応

a iv　〈高野本〉などの「ぞ」（係助）またはそれを含む語句が〈天草版〉では対応語句なし

b i　〈天草版〉の「ぞ」（終助）が〈高野本〉などの「ぞ」（終助）と対応

b ii　〈天草版〉の「ぞ」（終助）が〈高野本〉などのその他の語句と対応

b iii　〈天草版〉の「ぞ」（終助）が〈高野本〉などでは対応語句なし

▼　a i　の例

〈天〉　剃るまでは恨みしかども，梓弓，真の道に入るぞ嬉しき．　309③

〈高〉　そるまではうらみしかどもあづさ弓まことの道にいるぞうれしき　下227⑧

（他に，〈天〉367⑮……〈高〉下342⑦，〈斯〉725③）

▼　a ii の例

〈天〉　成親卿と申す人……，なんとぞして平家を滅ぼいて本望を遂げうずると企てられた。18⑰

〈高〉　（成親卿）「……。いかにもして平家をほろぼし，本望をとげむ」との給けるこそおそろしけれ。　上45⑫

▼　a iiiの例

〈天〉　（俊寛僧都が娘のことを）人にも見え，宮仕ひをもして身をも育てうずるかと言うて，嘆かれたをもって，……，子を思ふ道には迷ふことも知られた。　90⑩

〈高〉　人にも見え，宮仕をもして，身をもたすくべきか」とて，なかれけるにぞ，……，子を思ふ道に迷ふ程も知られける。　上166⑦

▼　a ivの例

A〈天〉　（蘇武は胡国で）十九年の春秋を送って，輿にかかれて故郷へ□帰った。　70④

〈高〉　十九年の星霜を送ッて，……輿にかゝれて古郷へぞ帰りける。　上132⑧

他に，〈天〉245⑧……〈高〉下132①，〈天〉79-21……〈高〉上157⑮）

B〈天〉　平家は……あわて騒いでもしや助かると，側な谷へ□こけ落つるところで，……汚し汚し，返せ返せと言ふ者も多かったれども，　167⑳

〈斯〉　平家ハ……周障騒キ，若ヤ助ルト，側ノ谷ヘソ落シケル。「キタナシヤ，返セ返セ」ト云フ族ラモ多カリケレトモ，　430⑪

（他に，〈天〉244⑨……〈斯〉495①）

▼　b iの例

〈天〉　若君も，姫君も……（維盛の）鎧の袖，草摺に取り付いて，これはさていづくへござぁるぞ？　185㉓

〈高〉　若公・姫君……父の鎧の袖，草摺に取つき，「是はさればいづちへとてわたらせ給ふぞ。　下45③

▼　b iiの例

A〈天〉　成親卿行綱を呼うで御辺をば一方の大将に頼むぞ：　20⑪

〈高〉　新大納言成親卿は多田蔵人行綱をよふで，「御辺をば，一方の大将に憑なり。　上47⑪

B〈天〉　木曽殿大きに喜うで……さらば好い敵ぞ，……とて，真っ先に進まれた。　244⑭

〈斯〉　木曽殿大ニ悦ンテ，「……サラハヨイ敵ゴサンナレ。……」トテ，マツサキニコソ進まれけれ。　495④

▼　b iiiの例

〈天草版〉で問答体にしたため付加することになった文の中での例

〈天〉　右馬．して木曽はなんとなったぞ？　242⑤

『平家物語』諸本には対応する文なし

〈天草版〉の「ぞ」（係助）の使用比率が〈高野本〉と比較して特に低いのは，a ivのような，〈高野本〉などに「ぞ」（係助）が存するのに〈天草版〉の対応箇所に存しない例が多いことである。a ivのAの例では，〈天草版〉で「ぞ」（係助）が消滅している。またBの例では，「ところで」（接続語）を補って続けるために「ぞ」（係助）が脱落することになった。このような例は多く存し，長くなる文が頻繁に見られるようになった。そして，平安時代以降に文語文で盛んに使用さ

れた（係助）としての用法は，室町時代末期の話し言葉では極端に衰退した。そして，このことが「ぞ」（終助）のｂii，ｂiiiのような例がかなり存するにもかかわらず，〈天草版〉の助詞「ぞ」の使用比率を低くした大きな要因となったのである。

〔VI〕　「こそ」（係助）〔会話文にも残存〕

助詞「こそ」の使用度数は〈天草版〉で372（11.49‰），〈高野本〉で1024（18.10‰）である。〈天草版〉の使用比率は〈高野本〉の0.63倍にあたる。なぜこのような低い比率になったのか，その要因を探ってみよう。

	こそ（係助）		ぞ（係助）	
	使用度数	使用比率	使用度数	使用比率
〈天草版〉	372	11.49‰	30	0.93‰
〈高野本〉	1024	18.10‰	1355	23.95‰

〈天草版〉の「こそ」（係助）が〈高野本〉などでどんな語句と対応しているか，また〈高野本〉の「こそ」（係助）が〈天草版〉でどんな語句と対応しているか，整理すると次のようになる。

ａｉ　〈天草版〉の「こそ」（係助）が〈高野本〉などの「こそ」（係助）と対応

ａii　〈天草版〉の「こそ」（係助）が〈高野本〉などの「ぞ」（係助）と対応

ａiii　〈天草版〉の「こそ」（係助）またはこれを含む語句が〈高野本〉などでその他の語句と対応

ａiv　〈天草版〉の「こそ」（係助）と対応する語句が〈高野本〉などに存しない

ｂｉ　〈高野本〉などに「こそ」（係助）またはこれを含む語句が存し，〈天草版〉では他の語句が対応

ｂii　〈高野本〉などに「こそ」（係助）またはこれを含む語句が存し，〈天草版〉では対応する語句が存しない。

▼　ａｉの例

〈天〉成親卿の軍兵を集めらるるも院宣とてこそ呼ばせらるれ：　22③

〈高〉（行綱が清盛に）「……。成親卿の軍兵召され候も，院宣とてこそ召され候へ」。　上76④

▼　ａiiの例

〈天〉　信俊参って見奉るに，……墨染めのおん袂を見奉るにこそ，信俊目も眩れ，心も消え入るやうで（連用形），……．　62-22

〈高〉　信俊参ッて見奉るに，……墨染の御袂を見奉るにぞ，信俊目もくれ，心も消えて覚えける。　上113⑥

▼　ａiiiの例

Ａ〈天〉　母とぢ……：今生でこそあらうずれ，後生まで悪道へ赴かうことこそ悲しけれと言うて，　102㉓

〈高〉　（母とぢ）「……。今生でこそあらめ，後生でだに，悪道へおもむかんずる事のかなッしさよ」と，　上25⑦

Ｂ〈天〉　清盛これを聞いて，ようこそしたれと，誉められた．　17⑲

〈高〉　入道，「神妙なり」とぞのたまひける。　上41⑯

▼　a ivの例

〈天〉　そののち景清が出て，水尾谷が甲のしころを引きちぎってこそ，平家方にもそっと色を直いてあった．　338②

〈高〉　対応語句なし（上278⑥～⑮のあたりを要約，〈斯〉では651②～⑦）

▼　b iの例

A〈天〉　（俊寛は成経の申すことに）頼みをかけて，その瀬に身をも投げられなんだ心中は，まことにおろかなことでござった。　76⑥

〈高〉　（俊寛は成経の申すことに）憑をかけ，その瀬に身をもなげざりける，心の程こそはかなけれ。　上143⑤

B〈天〉　このやうに人の思ひ嘆きの積もる平家の末は何（なん）とあらうか？　恐ろしいことぢゃ．　92㉑

〈高〉　か様に人の思嘆きのつもりぬる，平家の末こそおそろしけれ。　上168⑥

▼　b iiの例

A〈天〉　（成経は）言の葉につけても父のことを恋しげに□仰せられた．　80⑪

〈高〉　（成経は）ことの葉につけて，父の事を恋しげにこその給ひけれ。　上158⑥

B〈天〉　該当の部分は省略，77③の次

〈高〉　昔壮里・息里が海岳山へはなたれけんかなしみも，今こそ思ひ知られけれ。　上144⑪

上記のうち使用度数の多いのは，a i，b i，b iiの場合である。そして〈天草版〉の使用比率が〈高野本〉に比較して低くなったのは，b i，b iiのような例が多いことである。b ii Bの例は〈天草版〉が口語訳された時に，原拠本の一部が省略されたために生じたものである。そして，b i，b ii Aは室町時代末期の話し言葉から「こそ」（係助）の使用が衰退し出したことを示している。が，a ii，a iii，a ivのような例も少数見られ，その中にはa iii Bのような，口語訳の際に生じたものも存すると推測されるのである。

五　む　す　び

本稿では，室町時代末期の口語体を基調にする天草版『平家物語』の助詞について，鎌倉時代からの文語体を基調にする『平家物語』〈高野本〉と比較しながら計量的な方面から調査・集計を進めた。最初に助詞の語彙の全体像を明らかにした。次に各語の使用度数順の語彙表を作成し，基幹語彙を設定した。第一基幹語彙は助詞全体の使用度数に対して50.00‰以上，第二基幹語彙は5.00‰以上である。これは先回論じた助動詞の基幹語彙に関する論考(注1)と同じ基準である。そして，助詞の基幹語彙と〈天草版〉の作品としての性格との関係を，第二基幹語彙を中心にして口語訳の原拠に近い本文を有する〈高野本〉〈斯道本〉などと比較しつつ考察した。

〈天草版〉の基幹語彙は第一（8語）・第二（10語）を合せて18語で，累積使用度数の比率は951.32‰である。助詞の受け持つ基本的な意味領域は，大部分これらによって表現できる。〈高野本〉についても，これが第一（7語）・第二（13語）を合せて20語，956.64‰で同様のことが言える。

〈天草版〉の助詞の第一基幹語彙の8語は〈高野本〉の使用度数の上位8語と同じである。順序も〈天草版〉の1，2，3位が3，1，2位になっていること以外は同じである。このことは，

助詞の各語が両作品において担っている役割に大差ないことを示している。

そして，助動詞の第一基幹語彙では〈天草版〉の「た」や〈高野本〉の「けり」のような使用度数の突出した語の存すること，第一基幹語彙で共通するのは3語にすぎないことなど，両作品において各語が担っている役割に大差があった。この点で第一基幹語彙の助詞は助動詞と大きな相違がある。

〈天草版〉の助詞の第二基幹語彙は〈高野本〉でも第二基幹語彙であるのが8語，不使用と中位語が各1語である。第一基幹語彙と比較すれば，〈高野本〉に存しない「から」（格助）が現れ，「で」（格助）が増加するという相違がある。しかし，不使用の3語（「なんだ」「まい」「らう」）も現れる助動詞の場合と比較すれば，その変動は小さい。

さて，前節において第二基幹語彙の6語を作品の性格と関係の強い語として，〈高野本〉，又一部は〈斬道本〉と比較しながら検討した。その結果を便宜上，次の2種に大別して解してみよう。

(1)　意味領域・語形・機能の変化に関係する語……「から」「で」「が」

(2)　係助詞の衰退に関係する語……「か」「ぞ」「こそ」

(1)の「から」は〈高野本〉などで「より」と対応することが多い。しかし，〈天草版〉では起点・経由点などの限られた意味領域で用いられる。そして，この領域では「より」を圧倒し，そのため〈天草版〉の「より」は使用度数が減少して中位語になった。

また「で」は「にて」の音韻変化によって語形が生じた。すでに〈高野本〉でも中位語で，会話文などにかなり使用されている。そして，多くは〈高野本〉で第二基幹語彙の「にて」と対応している。が，「にて」は〈高野本〉で第二基幹語彙であったのに，口語訳で多くが「で」と書き直されたため，〈天草版〉では使用度数が激減して低位語になった。

ここに〈天草版〉で顕著に増加する語が現れると，〈高野本〉などで対応する語が減少するという変化を観取することができる。

他方，「が」（格助・接助）は両本とも第二基幹語彙の中に入る。けれども使用比率に大差がある。〈天草版〉の「が」は使用比率が〈高野本〉の2倍に近い。そのうちの（格助）だけを取り上げても，2倍に近い。この原因は主格の機能の用例が増加したことである。〈高野本〉などでは主格を示すのに助詞を用いないことが多い。が，〈天草版〉ではそれを明確に示すために「が」が用いられるようになった。又，「の」を用いることの多かった主格表示も一部は「が」に書き直された。さらに（接助）としての用例も2倍近くに増加している。和漢混交文の〈高野本〉などでは連続する二つの短い文を，口語訳の時に〈天草版〉では前後の意味の関係を示す接続語句でつないで長い文にした。その際多く「が」を用いることに起因している。

(2)の（係助）の衰退に関係する語として，第一に「ぞ」が上げられる。使用比率が〈高野本〉の半分にも達していない。その原因は使用度数の大部分を占める（係助）としての機能が衰退したことである。（終助）としての使用度数は増加しているが，この語の使用比率にあまり影響していない。

第二基幹語彙の中でこれに続く語として「こそ」（係助）がある。この語は〈天草版〉では使用比率が〈高野本〉の半数を超える。それらの多くは会話文中で〈高野本〉の「こそ」と，また一部「ぞ」（係助）と対応している。全体としては（係助）衰退の流れを読み取ることができる。けれども「ぞ」とちがって，まだ話し言葉としてかなり使用されていたと言えよう。

これらと反対に，「か」は使用比率が〈高野本〉と比較して増加している。（係助）としては減少しているけれども，それ以上に（終助）としての用例が増加しているからである。そして多く

は〈高野本〉などでは同じ疑問の意味の「や」（係助）と対応している。換言すると，「か」の増加は同じ語の（係助）から（終助）への機能の変化はわずかで，同じ意味で異なる語の（終助）への変化が見られるのである。そして，そこには「ぞ」と同様に「か」「や」両語の（係助）としての機能の衰退が関連しているのである。

〈天草版〉は第一節で述べたように，キリシタンの宣教師たちが日本語と日本のイストリヤを学ぶためのテキストとして編集された。そして，この日本語はキリストの教えを伝道するのに役立つことを目標にし，当時の都（室町時代末期の京都）の話し言葉を選んだ。が，第一基幹語彙の全語および第二基幹語彙の10語中の８語が〈高野本〉と共通して現れていることから，これらが口語訳の原拠にした『平家物語』でも多く用いられていたことが推測できる。又「から」「で」は当時の都で定着し出した言葉，「が」は主格や（接助）として多く用いられるようになり，「ぞ」は係助詞としての用法が衰退し終助詞として盛んに用いられたことが判明する。

（係助）の機能の衰退による使用度数の減少は「こそ」「か」にも見られる。「こそ」は（係助）としての役割が減少しても，まだ用いられていた。「か」は「ぞ」と同じように（終助）になるものも見られるが，「や」の役割をも担い，語としての使用度数が増加した。このように〈天草版〉の助詞の各語について意味範囲・語形・機能，（係助）の衰退の状況を検討すると，文語体の中での用法から室町時代末期の京都語の話し言葉の中の用法へと，変化し続けている現象を〈天草版〉の第二基幹語彙の中に明確に見ることができると言えよう。そして，それは〈天草版〉の作品を支える言語の面での特徴となっているのである。

注　　記

（注１）「天草版『平家物語』における助動詞の基幹語彙について――『平家物語』〈高野本〉との比較を中心にして――」近藤政美，『岐阜聖徳学園大学国語国文学』第20号（2001年3月）所収。

（注２）「天草版『平家物語』の語彙の特色」濱千代いづみ・近藤政美，『天草版平家物語語彙用例総索引』第４冊の解説Ⅱ参照。

（注３）「基本語彙・基礎語彙」真田信二，岩波講座『日本語』9〔語彙と意味〕所収，岩波書店刊行，1977年。諸先学の使用法をまとめたものである。執筆者の定義・見解ではない。

（注４）「平安時代和文脈系文学の基本語彙に関する二三の問題」大野晋，『国語学』87集所収，1971年。この論文はその後の語彙研究に多くの示唆を与えた。

（注５）『平家物語』〈高野本〉には「から」（格助）が存しない。しかし，「からに」（接助）が３例見られる。いずれも「だからといって」の意味で，逆接的条件を示している。
例　（木曽義仲）「いかで車であらんがらに，すどをりをはすべき」とて，上91⑫
同系統の〈竜大本〉（竜谷大学図書館蔵本）でも同様である。

（注６）不干ハビヤンが天草版『平家物語』の本文を作成するために原拠として用いた『平家物語』については，多くの古写本・古刊本を比較すると，十二巻本系統のもので範囲により３種の本文が想定される。が，それらを厳密な意味で現存本の中から特定することはできない。原拠本に近い本文を有する古写本の名で示すと，次のようになる。

平家物語（十二巻本）の範囲		天草版『平家物語』の原拠本に近い諸本の例	天草版『平家物語』の原拠本との距離(相対的)
A	第一～三巻	〈竜大本〉〈高野本〉	かなり近い
B	巻四～七巻	〈斯道本〉 〈小城本〉〈鍋島本〉	極めて近い かなり近い
C	巻八	〈平松本〉〈竹柏園本〉	近い
D	巻九～巻十二	〈斯道本〉 〈小城本〉〈鍋島本〉	極めて近い かなり近い

備考　1　BとDの範囲は同一の本を原拠にしている。
　　2　『中世国語論考』（近藤政美著，和泉書院刊行，1989年）参照。

（注７）　助詞「や」を機能によって分類し，使用度数・使用比率を示すと次のようになる。

	や（合計）	（係助）	（終助）	（間助）	（並助）
	使用比率	使用比率	使用比率	使用比率	使用比率
〈天草版〉	120	41	3	48	28
	3.71‰	1.27‰	0.09‰	1.48‰	0.86‰
〈高野本〉	567	343	42	165	17
	10.02‰	6.06‰	0.74‰	2.92‰	0.30‰

文　　献

［1］　『平家物語総索引』金田一春彦・清水　功・近藤政美編，学習研究社刊行，1973年。本文は日本古典文学大系『平家物語』（高木市之助・小沢正夫・渥美かをる・金田一春彦　校注，岩波書店刊行，上-1959年，下-1960年，底本は竜谷大学図書館蔵本）。

［2］　『天草版平家物語総索引』近藤政美・伊藤一重・池村奈代美編，勉誠社刊行，1982年。本文は勉誠社文庫『天草版平家物語』（大英図書館蔵本の影印，勉誠社刊行，上-1977年，下-1979年）。

［3］　『平家物語〈高野本〉語彙用例総索引』（自立語篇）全３冊　近藤政美・武山隆昭・近藤三佐子編，勉誠社刊行，1996年。本文は新日本古典文学大系『平家物語』（梶原正昭・山下宏明　校注，岩波書店刊行，上-1991年，下-1993年，底本は東京大学国語研究室蔵本で高野辰之旧蔵）。

［4］　『平家物語〈高野本〉語彙用例総索引』（付属語篇）全３冊 近藤政美・武山隆昭・池村奈代美・濱千代いづみ・近藤三佐子編，勉誠社刊行，1998年。本文は新日本古典文学大系『平家物語』（前項参照）。

［5］　『天草版平家物語語彙用例総索引』全４冊　近藤政美・池村奈代美・濱千代いづみ編，勉誠出版刊行，1999年。第１冊は〈影印・翻字篇〉，第２冊以降は語彙用例総索引。

［6］　東京大学文学部国語研究室蔵『平家物語』（高野辰之旧蔵）。新日本古典文学大系『平家物語』による。文献［3］の説明を参照。

［7］　慶応義塾大学付属斯道文庫蔵『平家物語』影印の『百二十句本平家物語』（汲古書院刊行，1970年）による。

［8］　駒沢大学付属図書館沼沢文庫蔵『平家物語』（沼Ｔ29，古写本）　原本調査および写真による。

［9］　『平家物語の文体論的研究』西田直敏著，明治書院刊行，1978年。